

国立国語研究所学術情報リポジトリ

四字漢語の構造

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国立国語研究所 公開日: 2017-03-31 キーワード: 作成者: 野村, 雅昭, NOMURA, Masaaki メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001035

四字漢語の構造

野 村 雅 昭

1. 四字漢語を問題にする理由

四字漢語ということばから、多くのひとびとが連想するのは、「四面楚歌・羊頭狗肉・大器晩成」といった、古代中国語に起源をもつ故事成語の類や、「文明開化・富国強兵・一億玉砕」など、スローガンのニュアンスをおびつつ、明治から第二次大戦中に用いられた一連の語であろう。それらは、たしかに、四つの言語単位からなる結合形態として、現代漢語のなかで、なお命脈をたもっているもので、これからあつかおうとする対象にふくまれるものではあるが、その一部でしかありえない。ここで、筆者が対象としようとするのは、現代語に出現する、四つの字音形態素からなる結合形態のすべてである。そして、四字漢語を構成する成分の形態論的特徴や、それぞれの成分の結合関係について記述することを目的とする。ただし、そのような目的、とりわけ、形態論的特徴を明らかにすることのために、一定数の言語単位からなる語を対象とすることに、どのような意味があるかということについて、説明する必要があるであろう。

近年、漢語の形態論に関する論考として注目すべきものがいくつか発表されている。森岡健二は、現代日本語全般の形態論的記述の中で、漢字一字からなる結合形態について論じ、漢語系語基を漢字形態素の派生上の特徴によって、五類に分類した。そして、漢語は、「単一語基」・「複合語基」およびその派生によって構成され、それらは、さらに他の語基と合成して「合成語」を構成し、

四語基以上からなるものは「連語」としてあつかうとの見解を示した*¹。また、宮地裕は、森岡の説を検討しつつ、雑誌で使用された高頻度の漢語の品詞的能力について分析し、形態上から、自立形態・結合形態に大別し、その下位区分として、単一語基・複合語基・接辞・助辞の要素を設定するとともに、それらを体言系・相言系・用言系・副言系の四種の「類詞」に分類して、それぞれに属する語基の特徴を指摘した*²。これらの論考は、現代漢語の形態論的記述を大きく前進させただけでなく、そこで設定された諸概念は、語彙調査の企画やその結果の分析にきわめて有効なものと考えられる。

ところで、筆者は、これまでに、当研究所がおこなった新聞語彙調査の結果の一部を対象として、つぎのような考察をほどこしてきた*³。まず、長単位と称する調査単位語で、語基がどのような順序で結合するかをパターン分類し、単純語基と複合語基との結合からなる比較的少数の基本パターンから、長単位語が構成されていることをあきらかにした。ついで、三字漢語を対象として、その成分を主語基（複合語基）と副語基（単純語基）に分け、それぞれを形態上の特徴によって分類するとともに、その結合関係の特徴を指摘した。また、三字漢語中の副語基として出現することが多く、接辞的な性格をもつ、「不（～〇〇）」・「非（～〇〇）」など否定の意をもつ一群の単純語基について、その特徴を検討した。

* 1 森岡健二「日本文法形態論」（『月刊文法』に43年から45年にかけて連載。漢語系語基についての見解が一箇所にまとめられているわけではなく、随所に展開されている。その骨子については* 2の宮地論文に要約されている。）

* 2 宮地 裕「現代漢語の語基について」（大阪大学『語文』31輯・48年7月）。ただし、宮地には、ほかに「現代文法・語論」（『講座正しい日本語』第5巻・46年9月）があり、形態論全般の問題をあつかっている。

* 3 「複次結合語の構造」（国立国語研究所報告49『電子計算機による国語研究V』47年3月）
「三字漢語の構造」（国研報告51『電子計算機による国語研究VI』48年3月）
「否定の接頭語『無・不・未・非』の用法」（国研論集『ことばの研究4』48年12月）

このような方法は、漢語の語構成を論ずるという観点からは、やや迂遠なものに感じられるかもしれない。単独の漢語語基そのものを対象とするのではなく、複合語（森岡の用語では、三字漢語は「合成語」に相当し、四字漢語は「連語」に相当する）の部分として出現する語基を対象として、その結合関係を分類するという方法は、語構成論よりも、むしろ、構文論に近いという印象を与える可能性もある*4。とくに、三字漢語はともかくとして、二つの複合語基どうしの結合という形態をとりやすい四字漢語では、いっそう、そうした印象をつよめることになるかもしれない。しかし、筆者の意図としては、漢語語基の性格を記述するためには、自立形態の場合だけでなく、結合形態の場合の用法をも考察すべきだとかんがえる。そして、豊富な具体例にもとづく実証的な研究こそが、筆者のようなたちばにある研究者にとって課せられたテーマであろうとおもわれる。

例をあげれば、単純語基か接辞かのあつかいになやまされる一字漢語は、和語や二回以上の結合を含む語とも結合することもあるが、多くは、二字漢語と結合して、三字漢語を構成する場合に、判定が問題になりやすい。また、複合語基（多くは、二字漢語）のなかには、結合形態としてしか用いられないものがあり*5、筆者の分析では、「顕微（鏡）」・「公德（心）」・「当事（者）」などの類は、三字漢語の成分として出現する二字漢語の総数（異なり）の一割をこえる比率をしめている*6。三字漢語や四字漢語を構成成分に分解し、その性格を検討することは、上のような点で意味をもつ。また、語基が派生する際の形態上

* 4 前注「日本文法体系論(18)」(2巻11号)では、三語基からなるものは、二語基からなる「合成語」と四語基以上からなる「連語」との中間的性格をもち、「合成語」として一語あつかいをして、「単語」との対比上、問題は少ないが、「連語」は、「語+語」の構造をとることになり、シンタクティカルな問題として、語構成論の範囲から省くべきだと見解を示している。

* 5 前注宮地論文では、雑誌にあらわれた高使用率漢語のうち、「国際-」と「-以外」が結合形態に属する複合語基としてあつかわれている。

* 6 前注3論文「三字漢語の構造」で報告。

の特徴によって、語基を分類しようとする場合に、語彙調査の使用例と数値的なうらづけは、おおいに役立つはずである。(新聞語彙調査の結果が、そういう意味で利用しやすいものだと、残念ながら、いえないが。)

以上のような問題意識から、本稿では、四字漢語について、次のような分析テーマを設定する。

- ①四字漢語を構成する語基は、どのような順序で結合し、どのような結合パターンを形成するか。
- ②四字漢語を構成する語基(とくに複合語基)には、どのような種類があり、どのような頻度で出現するか。
- ③複合語基は、それぞれ、どのような複合語基と結合しやすいか。また、その際に、どのような構文論的關係をもつか。

これらのテーマを解明するためには、いくつかの概念規定をおこなわなければならないが、ここで一括して定義することなく、論中で必要に応じておこなうことにする。

2. データの性格

この調査の対象としたのは、新聞語彙調査^{*7}に出現した、約19万語(異なり数)の長単位語である。直接には、同漢字調査で作製した、表や三行広告に出現したものを除く、約11万語のファイルから、約3分の1の抽出比でぬきだした長単位語を対象として、四字漢語に該当するものを採集した。長単位語とは、文節から付属語を切り離れたものとはほぼ等概念である。

ここでいう「四字漢語」とは、漢字一字に相当する字音形態素四個からなる結合形態で、字音としてもちいられていても、「歌舞伎」・「型録」などの借字に類するものは、字音形態素とはみとめない。作業手順としては、長単位語中に出現した、四つの形態素からなる結合形のうち、まず和語形態素・外来語形

*7 国研報告37・38・42・48『電子計算機による新聞の語彙調査』(45年2月～47年11月)に、その詳細な報告がある。

態素を含むものを除き、さらに、すべて字音形態素からなるもののうち、次の①～③に該当するもの、および、それを含むものを除いた。

- ① 接辞：御婦人用・御成婚式（「御」以外は、接辞と認定しなかった。）
- ② 数詞：三千二百・十五年間・二十世紀・一塁走者（例外：千差万別）
- ③ 固有名：佐藤栄作・鷗外全集・柏鵬対決/阪神地方・米国政府・吉祥寺駅/慶応大学・大和証券・三福会館・二科会員

これらのものを除いた理由は、漢字一字に相当する部分が語基か否かを認定する上で、問題を含むものがあること、したがって、四字漢語中の語基の結合関係を明らかにするというテーマにてらして、問題の所在をはっきりさせるという意味で、必ずしも重要でないと判断したことによる。

なお、新聞では、見出しや広告などに、つぎのような文相当ともみられる結合形態が出現しやすいが、とくに、文中に出現した形態との区別をせずに、データとして採集した。四字漢語の分析が、一面では、構文論的な問題とかかわることを否定しなくなかったからである。

○王選手が婚約発表　お相手は小八重恭子さん（見出し）

○新春特別号　本日発売（広告）

3. 四字漢語の構成パターンと出現形態

3.1 四字漢語の構成パターン

四字漢語は、四つの語基（形態素）からなりたっているわけであるが、それぞれの語基が直接にどの語基と結合しているかという点に着目して、分類してみると、二種五類に大別することができる。（形態素が必ずしも語基と一致するわけではないが、それについてはのちに述べる。）以下に、それぞれの語例を示す。

< I 型 >

(○+○)+(○+○)：上院議員・外国映画・時限爆弾・
予備選挙・景気回復・有料道路・

公式訪問・産炭地域・密輸基地
主演女優・婚約解消・応援演説

〈非 I 型〉

- ① 類 $\{(\bigcirc+\bigcirc)+\bigcirc\}+\bigcirc$: 文房具店・郵便局長・自家用車
 $\{\bigcirc+(\bigcirc+\bigcirc)\}+\bigcirc$: 有資格者・不退去罪・都知事選
- ② 類 $\bigcirc+\{(\bigcirc+\bigcirc)+\bigcirc\}$: 新予算案・総建築費・両飛行士
 $\bigcirc+\{\bigcirc+(\bigcirc+\bigcirc)\}$: 前副首相・超遠距離・権大僧正
- ③ 類 $(\bigcirc\cdot\bigcirc)+(\bigcirc+\bigcirc)$: 中長距離・小中学校・正副議長
 $\{(\bigcirc\cdot\bigcirc)+\bigcirc\}+\bigcirc$: 農畜産品・病産院名・各小学校
 $(\bigcirc+\bigcirc)+(\bigcirc\cdot\bigcirc)$: 巡視船艇
- ④ 類 $(\bigcirc+\bigcirc+\bigcirc+\bigcirc)$: 都道府県・市区町村・甲乙丙丁

以上の二種五類の型別に、データに出現した四字漢語の数を示したのが表 1 である。異なりと延べでは、出現率に大きなちがいはみられない。どちらの場合も、I 型が 90 パーセント以上を占めており、二字漢語が結合形として出現する場合に、二字漢語と結合する率が高いといわれていること^{*8}と呼応した結果

表 1 データに出現した四字漢語の数

		異なり数	延 べ 数
I 型		3224 (91.2)	6491 (92.6)
非 I 型	①	207 (5.9)	309 (4.4)
	②	91 (2.6)	186 (2.7)
	③	12 (0.3)	18 (0.3)
	④	3 (0.1)	5 (0.1)
計		3537(100.0)	7009(100.0)

() 内の数字はパーセントをあらわす

^{*8} 国研報告 13『総合雑誌の用語 後編』(33 年 2 月)の分析では、前部分の二字漢語が二字漢語と結合する回数是一字漢語と結合する回数とあまりかわりがないが、後部分として結合する場合は、二字漢語と結合する回数が圧倒的に多いことをしめしている。

をしめしている。非I型は、合計でも、10パーセントに達していない。①・②類は、三字漢語に一字漢語が前あるいは後から結合した型であるが、二回以上の結合をした語には一字漢語が接続しにくいことをものがたるものである。また、三字漢語の場合に、(○+○)+○のように、一字漢語が後から接続する型のほうが、前から接続する○+(○+○)型よりも出現率が高いことを反映して、①類では、{|(○+○)+○|+○型のほうが、{|○+(○+○)|+○型よりも、②類では、○+{|(○+○)+○|型のほうが、○+{|○+(○+○)|型よりも、それぞれ出現率が高くなっている。一字漢語が後部分に接続する①類のほうが、前部分に接続する②類よりも、出現率が高いのも、二字漢語に接続する一字漢語と同様の傾向が、三字漢語に接続する一字漢語の場合にもみられることをうらがきしているものとみられる。③類には、このほかの結合型もありうるが、データに出現したものは、すべて、さきにあげた三つのパターンに所属する。三字漢語の場合でも、「陶磁器」や「養父母」のような例の出現率は、あまり高くないが、四字漢語では、いっそう出現しにくそうである。④類の場合にも、同じことがいえる。

3.2 四字漢語の出現形態

表2は、データ中に出現した四字漢語の形態を分類して、延べ語数によって示したものである。形態別の分類の基準は、下記のようなものである。

- ① 自立…いわゆる格助詞をともなうもの。(例省略)
- ② 派生…いわゆるサ変動詞や形容動詞の語幹となるもの。(例省略)
- ③ 独立…接辞や助辞をともなわずに、文中で語(文節)の資格をもつものの。

例○1階で歌う人気タレント…その映像は夢のような超色彩で、全階に同時再現。

○日本画壇の巨匠十四氏による華麗な彩色挿画五十六葉を収めて、文画一体、源氏物語を現代に再現する豪華本『谷

崎源氏』がついに完成しました。

- ④ 結合…他の語基（一部、接辞もふくむ）またはその結合形と結合しているもの。

例○美術骨董商・社会主義者・免許停止処分・予算編成方針
○新経済計画・各郵便局番・对外文化交流・赤色帝国主義

表2 データ中の四字漢語の出現形態

		自 立	派 生		独 立	結 合		計
			～スル	～ナ		前部分	後部分	
I 型		4361 (67.2)	67 (1.0)	43 (0.7)	67 (1.0)	1154 (17.8)	799 (12.3)	6491 (100.0)
非 I 型	①	198 (64.1)	1 (0.3)	3 (1.0)	—	23 (7.4)	84 (27.2)	309 (100.0)
	②	132 (71.0)	—	2 (1.1)	—	14 (7.5)	38 (20.4)	186 (100.0)
	③	11 (61.1)	—	—	—	7 (38.9)	—	18 (100.0)
	④	2 (40.0)	—	—	—	—	3 (60.0)	5 (100.0)
計		4704 (67.1)	68 (1.0)	48 (0.7)	67 (1.0)	1198 (17.1)	924 (13.2)	7009 (100.0)

（ ）内の数字は、それぞれの型別の総数に対する比率（パーセント）をあらわす

この分類の基準は、語彙調査の長単位語認定の作業規則によっているため、形態論的に厳密なものではないので、概括的な分析にとどめざるをえないが、三字漢語の場合と比較してみると、いくつかの特徴をとらえることができる。非 I 型に属するものは、少数でもあり、結合の場合を除いては、I 型とのあいだに、おおきな差はみられないので、四字漢語全体の比率を三字漢語のそれとくらべてみることにする。三字漢語の場合の集計のしかたにあわせて、整理しなおすと、下記のようなになる。（数字はパーセント。）

	三字漢語	四字漢語
自立	70.7	68.0
派生	7.9	1.7
結合	21.4	30.3

すなわち、「自立」に属するものの比率は、ほとんどかわりがないが、「派生」では、三字漢語が、「結合」では、四字漢語が、それぞれ優勢をしめている。四字漢語で「独立」としたものは、この対比表では、「自立」の項にふくめてあるが、大勢には影響しないとおもわれる。この結果からみちびかれることの第一は、四字漢語は、単語としての機能がひじょうに制約されているということである。すなわち、二字漢語や三字漢語と比較すると、派生語を構成する力がほとんどないことが、それを証明している。四字漢語として辞書の見出しとしてあげられるものには、「周章狼狽（～スル）」・「一知半解（～ダ）」など、サ変動詞や形容動詞の語幹に相当するものが少なくないが、四字漢語全体としてみると、むしろ例外的な存在といえよう。データに出現した、サ変動詞や形容動詞の語幹に相当するものには、新聞特有の文体を反映した、つぎのような臨時的結合という印象をあたえる例が豊富にみられる。

○スル（個別面接～・正式決定～・過大評価～・特別控除～・緊急上呈～・電話連絡～・結婚退社～・調査検討～・汚職解散～・大規模化～）

○ナ（栄養豊富～・自己本位～・交渉可能～・前近代的～・超経済的～）

この点で、さきにのべたように、森岡健二が、二字漢語を「合成語」とし、「語＋語」の構造をとる四字漢語を「連語」とした見解は当をえているといえよう。さらに、本稿でいう三字漢語や、非Ⅰ型①類・②類の四字漢語について、森岡は、つぎのようにのべている*⁹。

問題は、この「合成語」と「連語」との中間的性格をもつものを、どちらに所属させるべきであるかということになるが、用例の多い三語基を中心に考えると、語基の結合の緊密さからいっても、また、「語＋語」の構造でないことからいっても、これらを二語の集合たる「連語」とすることには抵抗を感じる。したがって、三語基のほうは「合成語」として一語扱いをするのが穏当だと考えたしだいであ

* 9 前注「日本文法形態論（18）」（2巻11号）

る。その点、「形態素＋語」の構造をもつ四語基のほうは、「語＋語」の構造をもつ「連語」よりは、三語基の「合成語」に近いから、「合成語」の扱いをしてもかまわないと思うが、構造がやや複雑なこと、四語基であることに着目して、機械的に「連語」の扱いをすることにする。

この処置が妥当であることは、表2の非I型の「派生」に属するものがI型の場合よりも少ないことから、うらづけられよう。また、森岡は、構文論上は、「連語」を「名詞的連語」・「動詞的連語」のように、「単語」相当のものとしてあつかうことができるとのべているが、四字漢語に関しては、「名詞的連語」がおおそうだということができよう。

第二の特徴は、上の対照表で「結合」としたものの出現率のちがいにみられる、結合力の差である。そのちがいをみるために、(1) 一個の漢字語基および接辞と結合したものと、(2) 和語・外来語の語基およびその一回以上の結合形、それに漢語語基の一回以上の結合形と結合したものにわけて、総数に対する比率（パーセント）を示すと、下記のようなになる。

	三字漢語	四字漢語
(1)	8.2	8.9
(2)	13.2	21.4

すなわち、(1)の場合には、それほどのちがいはないが、(2)の単語（または合成語や連語）と結合する力において、四字漢語のほうがすぐれていることを意味している。このことは、二字漢語の結合力の強さと対比してみた場合に、一見、奇異な感じをあたえる。三字漢語のほうが四字漢語よりも、単語（あるいは合成語）としての性格がつよいとおもわれるからである。この結果をすなおに解釈するとすれば、三字漢語のほうが複合語基的な性格をもち単独で語を構成する力にすぐれているのに対し、四字漢語は、体言相当の連語として、他の語と結合する際には、むしろ安定した形態をもつということになろう。また、データが新聞に依拠したものであるということも、下記のような例をおおく出現させる一因としてかんがえるべきかもしれない。すなわち、人間活動の主体

やそれがおこなわれる場所・組織をあらわす慣用的な表現や、文相当の語連続などに、新聞では、四字漢語が出現しやすいからである。

ケネディ上院議員・福永官房長官・劉少奇国家主席・次期総評議長・政府
与党首脳/館山航空基地・村田簿記学校・第一商業高校・第二次世界大
戦・日米経済会議・日ソ航空交渉/地価高騰要因・経済優先路線・合併会
社設立・高校野球出場校

このように、四字漢語は、名詞的連語を構成することがおおく、用言的連語を構成して、語基に相当するはたらきをもつことはすくない。また、新聞によくもちいられる慣用的な名詞的連語や文相当の語連続の要素として、他の語と結合する力を有している。これらの特徴は、三字漢語とも異なるものであり、現代語の連語の性格を論ずる場合に、その中核的な存在として、あつかう必要があることを意味している

3.3 四字漢語の構成要素となる接辞的単純語基の性格

I型を構成する二字漢語(複合語基)の性格については、次の章で詳述するが、非I型は、出現数もすくないので、ここで、その性格について、かんたんにふれることにする。問題とするのは、①類と②類である。

①類は、三字漢語の後部分に、一字漢語(単純語基)が結合したものである。三字漢語の場合には、後部分の単純語基には、種々のものが出現したが、四字漢語の場合には、比較的、限定される傾向がみられる。特にめだつのは、次のように、組織・機構・範疇などをあらわす三字漢語に、人間をあらわす一字漢語がついたものである。

長(報道課～・調査会～・職員局～・研究所～・管理部～・遺族団～)

員(設営隊～・領事館～・機動隊～・制作部～・消防署～・郵便局～)

者(経済学～・法医学～) 主(菓子店～・薬局店～) 児(保育園～)

ついで多いのは、場所や位置関係をあらわす、つぎのような一群である。

内(派生所～・大気圏～・執行部～・国有林～・中学校～)

上（延長線～・航空路～・労基法～） 中（合意書～） 間（科学者～）

三字漢語の場合によく出現する、「-的」・「-用」・「-式」などの接辞的性格のこいものも出現している。ただし、同類の「-性」は、一例も出現してない。

的（治療薬～・世界史～・共産党～・栄養剤～・共同体～・理想家～）

用（旅行者～・成人式～・小学生～・大学生～）

式（継電器～・真空管～・中項目～） 風（労務者～）

化（複複線～・準主流～・大規模～）

これらを概括すれば、三字漢語の後部分に接続する一字漢語は、接辞的な性格をもったものが多いということになる。逆に、三字漢語の場合にみられる、自立的語基（従業員寮・試写会券）、訓との対応をもつ語基（文房具店・不定期船）、略語から生まれた語基（都知事選・植物画展）などは、四字漢語の構成要素としてはあらわれにくいようである。

②類は、一字漢語が前部分として結合したものであるが、もともと、前部分にくる単純語基のバラエティがすくないだけに、そうおおくの種類は出現していない。全体としてめだつのは、つぎのような連体詞的性格をもった語基である。

副（～本部長・～支店長・～司令官・～技師長・～理事長・～委員長）

各（～報道人・～町内会・～選挙区・～小学校）

両（～対局者・～学部長・～審議会・～飛行士）

総（～建築費・～大理石・～天然色・～参謀長）

前（～副首相・～大統領） 全（～関係国・～内容積）

某（～私立大・～副部長） 現（～事務長・～執行部）

同（～地方局・～委員長・～観測所）

そのほか、自立的語基に相当するものも種類は少ないが、いくらか存在する。

軍（～機関紙） 党（～代表団） 都（～水道局） 県（～衛生部）

訓との対応をもつ、連体修飾語の傾向のつよい語基は、「新」・「大」がやや多いほかは、あまり多くない。

新（～執行部・～有権者） 大（～会議室・～電力源）

名（～指揮者） 軽（～乗用車） 高（～忠実度）

否定の意をあらわし、接辞的な性格のつよい、「不-」・「無-」・「未-」などがあらわれないのも、三字漢語の場合とことなる特徴である。ただし、「非-」は、三字漢語に接続する機能を有している。

非（～合理的・～戦闘員・～保有国）

以上をまとめると、三字漢語と結合して四字漢語を構成する単純語基には、接辞的な性格のつよいもの（後部分）、連体詞的な性格のつよいもの（前部分）がおおく、三字漢語の成分として二字漢語と結合する一字漢語（単純語基）には、二字漢語の成分にもなりうるものが豊富に出現するが、三字漢語に結合しうる単純語基の種類は少ないようである。また、三字漢語の構成要素にはなりうるが、四字漢語の構成要素にはなりにくいもの（「-性」・「不-」など）があることも推測されるが、いまは、その指摘だけにとどめておく。

4. 四字漢語の成分となる語基の性格

4. 1 語基とはなにか

前章でみたように、四個の字音形態素からなる結合形は、ほとんどがⅠ型 { (○+○)+(○+○) } によってしめられている。すなわち、二字漢語どうしの結合形において、どのような種類の二字漢語が出現しているかということが本章の課題であり、形態論的な問題にふれるところがおおい。そこで、これまで無定義にもちいてきた諸概念について、ここであらためてかんがえることにしたい。

構造言語学流にいう「語 (word)」の定義は、かならずしも、一定していないが、それが統語論における最小の単位であること、そして、それがさらにちいさな部分からなりたちうることは、みとめてよからう。その「ちいさな部分」を「形態素 (morpheme)」とかんがえて、これまで論をすすめてきたわけであるが、ここで、まず、「形態素」と「語基 (stem)」の関係にふれる必要があるだろう。(語の構成成分を「形態素」とみるか「形態」とみるかという論議、および、

「形態素」の定義については、ここでは、一応、問題としないことにする。)

「形態素」の形態的特徴として、自立形式と結合形式の二種の別が存在する。これらのうち、単独では「語」となることができず、もっぱら結合形式としてのみ出現するものを、「接辞(語基について語を形成するもの)」と「助辞(自立形式の語基について構文論的機能を添加するもの)」とよび、自立形式および接辞と助辞以外の結合形式を「語基」とよぶことにする。この定義は、「語基」を定義しないかぎり、循環論法であり、接辞や助辞についての説明があまりに簡単すぎるが、これまた、省略にしたがう。

語基とは、森岡の定義^{*10}によれば、「語(word 最小自立形式)の stem すなわち語の基幹をなす形態素」ということになるが、宮地は、ややくわしく、つぎのようにのべている。

語基とは、語の構成に意味的基幹としての役わりを果たすものの意であるが、基幹と基幹でないものとの区別は、これが意味にかかわる概念であるだけに明確でないところをのこす。また、意味にかかわる概念だからと言って、形式とのかかわりを問わないものではない。

本稿で筆者がかんがえる語基の概念も、これとへだたるものではないが、日本語の形態論をあつかううえで、以上のような定義で問題となるのは、漢字一字からなる字音形態素の処置である。すなわち、字音形態素のおおくは、結合形式としてしかあらわれず、意味的にもあいまいなもの^{*11}がすくなくない。この点に関して、森岡が、字音形態素を語基とみとめつつも、他の字音語基と結合して、漢字熟語を構成する機能しか有しないもののあることを指摘し、「複合語基」という概念をたて、形態上も、単純語基とほとんどかわりがないところから、語基相当のあつかいをすべきだとしている^{*12}のは、傾聴にあたしい。

^{*10} 「日本文法体系論(10)」(1巻12号)

^{*11} 字音形態素にこの種のものが多いことは、下記の論文に指摘がある。宮島達夫「無意味形態素」(国研論集『ことばの研究4』48年12月)

^{*12} 「日本文法形態論(11)」(1巻13号)

事実、現代語で使用される漢語のおおくは、この種の複合語基であり、漢字二字からなる結合形式を一単位として処理することは、語構成論上からも必要なことである。また、字音系語基に関するこのような措置は、語彙調査における単位の認定の際にも、有効なものとなるとおもわれる。筆者がこれから分析の対象とする四字漢語中の成分である二字漢語は、この複合語基に相当する。小論では、これまでもそうしたあつかいをしてきたが、以下、本稿でいう「語基」とは、上述のような概念をさすこととする。また、この章以下で、単に語基という場合も、この複合語基をさすこととし、必要のある場合のみ、単純語基と複合語基の区別をする。

4.2 語基の種類と出現数

I型四字漢語の成分として出現した語基を、単独で出現する場合の接辞や助辞のつきかたによって分類してみると、A～Fの六種類およびその複合形である四種類をあわせて、十種類になる。この分類には、宮地の設定した「類詞」のかんがえかたをあわせることが有効だとおもわれるが、前稿の三字漢語の分析の結果とくらべる意味もあるので、その際の方法を踏襲することにする。以下に、分類の基準と所属語例をあげる。

A類……いわゆる格助詞をともなうもの：人間・世界・鉄道・芸術・問題

B類……「ナ」をともなうもの、および、他の類に属さず「ノ」をともなうもの：有名・的確・慎重・高級・特別/単独・公式・急性

C類……「スル」をともなうもの：敵対・混成・一服・付帯・投身

D類……接辞や助辞をともなうことなく文中に出現しうるもの、および、他の類に属さず「ニ」をともなうもの：直接・随時・年中/一斉・同時

E類……「ト・タル」をともなうもの：確固・揚々・片々

F類……他の語基や接辞と結合してのみ出現するもの：国際(～〇〇)・民主(～主義)・積極(～外交)・産炭(～地域)・本位(自己～)

A B 類…安全・異常・自由・不満・名誉

A C 類…予定・研究・解決・行動・訪問

B C 類…共通・共同・共有・現有・類似

ABC 類…不足

上の分類によって、調査に出現した四字漢語の成分となった語基を構成上の位置別にしめたのが表 3 である。延べ数の計は、表 1 の I 型四字漢語の総異なり数と一致するが、「国際（～会議・～競争・～協定・～情勢）」のように、いくつもの語基と結合するものがあるので、異なり数の計は、前部分と後部分では一致しない。また、この表の前部分と後部分の計をあわせたものが四字漢語を構成する語基の異なり数と一致するわけではなく、前部分と後部分に共通して出現するものがあるので、その関係をあきらかにしたのが、表 4 である。すな

表 3 四字漢語中の語基の位置・種類別出現数

	前 語 基		後 語 基	
	異なり数	延 べ 数	異なり数	延 べ 数
A	755 (50.0)	1723 (53.4)	767 (52.9)	1861 (57.7)
B	86 (5.7)	207 (6.4)	30 (2.1)	35 (1.1)
C	21 (1.4)	37 (1.1)	—	—
D	8 (0.5)	21 (0.7)	—	—
E	1 (0.1)	1 (0.1)	2 (0.1)	2 (0.1)
F	129 (8.5)	184 (5.7)	42 (2.9)	55 (1.7)
AB	19 (1.3)	84 (2.6)	9 (0.6)	10 (0.3)
AC	487 (32.2)	950 (29.5)	595 (41.0)	1254 (38.9)
BC	4 (0.3)	16 (0.5)	2 (0.1)	2 (0.1)
ABC	1 (0.1)	1 (0.1)	2 (0.1)	5 (0.2)
計	1511(100.0)	3224(100.0)	1449(100.0)	3224(100.0)

わち、2500 種類の語基のくみあわせによって、3224 種類の四字漢語が構成されていることになる。（なお、以下では、前部分にあらわれる語基を「前語基」、後部分にあらわれる語基を「後語基」とよぶことにする。）

表 4 四字漢語中の語基の異なり数

	前語基専用	前後共用	後語基専用	計
A	527 (40.7)	228 (17.6)	539 (41.2)	1294(100.0)
B	81 (73.0)	5 (4.5)	25 (22.5)	111(100.0)
C	21(100.0)	—	—	21(100.0)
D	8(100.0)	—	—	8(100.0)
E	1 (33.3)	—	2 (66.7)	3(100.0)
F	126 (75.0)	3 (1.8)	39 (23.2)	168(100.0)
AB	15 (62.5)	4 (16.7)	5 (20.8)	24(100.0)
AC	269 (31.1)	218 (25.2)	377 (43.6)	864(100.0)
BC	3 (60.0)	1 (20.0)	1 (20.0)	5(100.0)
ABC	—	1 (20.0)	1 (50.0)	1(100.0)
計	1051 (42.0)	460 (18.4)	989 (39.6)	2500(100.0)

表 4 によって、四字漢語中にもちいられた語基の種類別による出現数をみると、A 類 (1294 種・51.8 パーセント) と AC 類 (864 種・34.6 パーセント) の二類によって、ほとんどがしめられており、他は、F 類 (168 種・6.7 パーセント) と B 類 (111 種・4.4 パーセント) がややおおい程度で、そのほかは、1 パーセントにも達していないことがわかる。また、前後に共通してもちいられる語基は、ほとんどが A 類と AC 類であり、類によっては、前語基として出現しやすいもののあることもうかがえる。そこで、表 3 にもどって、前語基と後語基の異なり数の計をくらべてみると、わずかながら、前語基のほうが多い。また、後語基にしめる A 類と AC 類をあわせたものの比率が約 94 パーセントであるのに対し、前語基では約 82 パーセントである。つまり、その差の分だけ、前語基のほうに、語基の種類・出現数ともに、後語基よりもバラエティにとんでいるということがいえよう。

異なり数と延べ数の比率には、そうおおきな差はみられないが、異なり数の比率よりも延べ数の比率がちいさい AC 類・F 類などは、その逆の値をしめす A 類とくらべて、相対的に、一語基の結合対象となる語基の数がすくない（すなわち、慣用的にせよ、臨時的にせよ、一回的結合関係がおおい）ことを意味

している。反対に、A類には、種々の語基と結合することが可能な語基がおおそうだということになる。このことを証明するためには、もうすこし複雑なてつづきが必要だが、これ以上は、ここではふれない。

4.3 語基の性格

4.3.1 A類の語基

もっとも出現数のおおいA類の語基は、現代漢語のなかでひんぱんに使用される二字漢語をふくんだグループである。使用率の高いものは、きわめて名詞的性格のつよいものであるが、四字漢語の成分としては、かならずしも、おなじ出現のしかたをするものばかりではない。以下では、四字漢語のどの部分に出現しやすいかという観点から、三つのグループを設け、種々の語基と結合する回数のおおいものの上位から順にえらんでみた。「前語基(後語基)」としてもっばら出現する」というのは、その用法しかないという意味でなく、出現例にかなりの差があるものもふくむ。

〔前語基・後語基のどちらにもよく出現するもの〕…41例(9回以上)

会社(～組織・合併～)・技術(～援助・航空～)・大学(～講師・短期～)・
学生(～時代・女子～)・産業(～構造・石炭～)・文化(～交流・古代～)・
企業(～経営・外国～)・政治(～運動・国際～)・行政(～改革・教育～)・
航空(～協定・民間～)・住宅(～相談・公営～)・工業(～水準・食品～)・
事業(～計画・観光～)・大会(～運営・全国～)・市場(～調査・金融～)・
政府(～与党・連邦～)・設備(～投資・通信～)・科学(～技術・自然～)・
業務(～管理・保管～)・工場(～地帯・製造～)・都市(～計画・中心～)・
議員(～総会・汚職～)・基地(～周辺・補給～)・社会(～保険・上流～)・
条約(～交渉・軍事～)・道路(～整備・高速～)・学校(～教育・専門～)・
高校(～野球・公立～)・事務(～次官・戸籍～)・大臣(～就任・文部～)・
音楽(～鑑賞・伝統～)・機械(～文明・木工～)・芸術(～作品・宗教～)・
首相(～演説・次期～)・国家(～元首・民主～)・映画(～監督・外国～)・

雑誌(～記者・少女～)・時間(～制限・犯行～)・写真(～撮影・記念～)・
構造(～転換・精神～)/経済*¹³(～成長・世界～)

〔前語基としてもっばら出現するもの〕…17例(7回以上)

地方(～自治・～銀行)・海外(～渡航・～派兵)・世界(～大戦・～平和)・
軍事(～政権・～目的)・交通(～安全・～機関)・自己(～主張・～資本)・
国民(～運動・～投票)・農業(～振興・～構造)・新聞(～記者・～週間)・
民間(～給与・～単産)・早期(～発見・～妥結)・宇宙(～飛行・～空間)・
国連(～加盟・～憲章)・女子(～店員・～学生)・電子(～技術・～頭脳)・
専門(～学校・～棋士)・国内(～問題・～事情)

〔後語基としてもっばら出現するもの〕…30例(7回以上)

問題(防衛～・愛情～)・対策(振興～・地価～)・主義(資本～・個人～)・
協会(新聞～・卓球～)・政策(侵略～・対外～)・機関(金融～・協議～)・
施設(保安～・軍事～)・会館(市民～・議院～)・地帯(丘陵～・多雪～)・
内容(演説～・作業～)・事件(殺人～・刑事～)・団体(圧力～・公共～)・
制度(雇用～・入試～)・条件(応募～・労働～)・体制(安保～・共闘～)・
本部(捜査～・対策～)・委員(教育～・選考～)・病院(国立～・総合～)・
価格(特別～・譲渡～)・期間(婚約～・実施～)・作品(入選～・主演～)・
時代(大学～・石器～)・規模(減税～・予算～)・長官(官房～・国務～)・
部門(農業～・声楽～)・作家(女流～・異色～)・状態(健康～・内乱～)・
装置(記憶～・発射～)・地域(指定～・過疎～)・連盟(野球～・将棋～)

ここにあげられた語基は、当然のことながら、結合形式として出現したものであるが、自立形式としても出現しうるもので、助辞がやヲを自由にとることができる。しかし、少数ではあるが、「海外(デ・ニ・ヘ)」・「早期(ニ)」のように、場所や時間をあらわすものには、特定の助辞とむすびつく傾向のあるものもみられる。体言的性格のつよい語基のなかで、自立形式としてしか出

*13 「経済」は、AB類に属するが、A類の用法としての出現回数・結合回数が圧倒的に多いので、便宜上、ここにふくめた。

現しないものがあるかないかは、今後の調査にまたなければならないが、おそらくその可能性はすくないとおもわれる。したがって、漢語の造語力のつよさの一半は、これら体言的性格のつよい語基によってささえられているとみることができるといえる。

このような分類を試みることは、語基の性格をかんがえるうえで、興味ある事実をしめしてくれる。たとえば、「地方」という二字漢語は、「関東～・九州～」のように、地名につづく場合は、後部分として結合するが、一般の名詞的語基と結合する場合には、ほとんど前部分として出現している。「熱帯～・海岸～」というような例もかんがえられるが、その場合でも、地域をさすことばと結合するという制約をもつようである。個々の語の記述の場合はもちろんのこと、語彙的な記述においても、こうした側面をとりいれる必要があるだろう。

ところで、ここで対象としているデータが新聞に依拠したものである以上、これらの語彙も、新聞という文章形態の特徴をあらわしているとみななければならない。四字漢語の構造が一面では構文論的な問題にかかわることをかんがえると、これらの二字漢語がどのような意味をあらわしているかということを問題にすることは、さきの「地方」の例のように、あながち、むだなことではないであろう。語の意味分類に関しては、すでに『分類語彙表』*¹⁴ があり、また、石綿敏雄は、構文論的な観点から、名詞の意味に着目して、『分類語彙表』をてがかりに、いくつかの分類試案を発表している*¹⁵。それらを参考にしつつ、上にあげた 88 種類の語基をいくつかのグループにわけてみたのが、下記のリストである。

〈時〉時代・期間・早期・時間

〈場所〉宇宙・世界・海外・国内・地方・都市・地域・地帯・基地・道路

*¹⁴ 国研資料集 6・39 年 3 月刊・林大担当。

*¹⁵ もっとも最近のものでは、下記の論文にくわしい。

石綿敏雄「言語処理からみた日本語動詞の用法」情報処理学会 C L 委員会資料・49 年 6 月

〈人間〉 国民・首相・大臣・議員・長官・委員・学生・作家・女子・自己
 〈組織〉 国連・国家・政府・社会・民間・会社・市場・病院・工場・学校・
 大学・高校・団体・連盟・協会・本部・機関・施設
 〈活動〉 政治・行政・軍事・大会・業務・事務・事件／経済・産業・企業・
 事業・工業・農業・交通・航空／文化・科学・芸術・映画・音楽・
 新聞・雑誌
 〈物〉 機械・設備・装置・写真・住宅・会館・電子・作品
 〈抽象〉 状態・構造・内容・体制・制度・部門・専門・規模・主義・対象・
 政策・条約・条件・問題・技術・価格

もっとも種類がおおいのは〈活動〉であるが、「経済」・「産業」などの生産的活動と「文化」・「芸術」などの精神的活動およびその所産とは、別に一類をたてることもできよう。ついで、〈人間〉および人間があつまって活動をおこなう〈組織〉が多数をしめている。〈組織〉は活動の主体になりうると同時に活動の場所にもなりうる。すなわち、「だれがどこでなにをするか」の「だれ」・「どこ」・「なに」に相当するものがこのA類におおいということは、新聞の文章の性格と無関係ではないとおもわれる。

それぞれのグループに属する語基は、前部分にも後部分にも出現する。比較的かたよりのあるのは、〈組織〉と〈抽象〉で、後語基になりやすいものがおおい。また、〈場所〉には、前語基としてあらわれやすいものがみられる。このような事実をあきらかにすることは、語基と語基の結合をかんがえるうえで有効だとおもわれる。それには、もっとおおくの二字漢語を分類する必要があるだろう。

4.3.2 AC類の語基

AC類の語基は、体言と用言の両方の性格をそなえるため、体言的性格のつよいものから用言的色彩のこいものまで、はばひろい用法がみられる。A類の場合と同様に、結合回数のおおいものを以下にしめす。

〔前語基・後語基のどちらにもよく出現するもの〕…37例（7回以上）

関係(～各国・友好～)・教育(～内容・学校～)・生活(～環境・舞台～)・
 防衛(～組織・基地～)・運動(～方針・市民～)・活動(～方針・経済～)・
 輸出(～規制・鉄鋼～)・調査(～報告・世論～)・生産(～調整・食糧～)・
 研究(～計画・共同～)・援助(～要請・財政～)・開発(～援助・技術～)・
 放送(～討論・中継～)・経営(～方針・放漫～)・記録(～映画・生活～)・
 指導(～価格・直接～)・投資(～保障・設備～)・労働(～条件・屋外～)・
 作業(～能率・発掘～)・交渉(～過程・団体～)・記念(～写真・落成～)・
 試験(～問題・就職～)・違反(～事実・交通～)・投票(～結果・人気～)・
 整理(～段階・在庫～)・監督(～強化・女流～)・戦争(～拡大・侵略～)・
 選挙(～期日・知事～)・拡大(～解釈・貿易～)・利用(～価値・共同～)・
 飛行(～状況・試験～)・設計(～変更・本格～)・競争(～意識・国際～)・
 希望(～日時・受講～)・消費(～抑制・砂糖～)・販売(～価格・月賦～)・
 輸入(～制限・原料～)

〔もっぱら前語基として出現するもの〕…12例(7回以上)

通信(～衛星・～設備)・建設(～工事・～計画)・保護(～施設・～動物)・
 貿易(～会社・～促進)・連続(～完封・～模様)・演奏(～態度・～曲目)・
 指定(～地域・～業種)・戦闘(～意欲・～行為)・遭難(～事故・～防止)・
 共闘(～会議・～体制)・編集(～委員・～会議)・公開(～実験・～討論)

〔もっぱら後語基として出現するもの〕…19例(6回以上)

会議(閣僚～・予備～)・計画(都市～・事業～)・措置(規制～・緊急～)・
 代表(読者～・首席～)・組織(全国～・犯罪～)・管理(行政～・集中～)・
 改善(待遇～・体質～)・旅行(観光～・視察～)・調整(意見～・生産～)・
 決定(正式～・閣議～)・回復(疲労～・国交～)・担当(政権～・企画～)・
 演説(応援～・基調～)・相談(進学～・住宅～)・制度(所得～・輸入～)・
 闘争(政治～・院外～)・予定(行事～・開通～)・協力(経済～・国際～)・
 協定(行政～・帰還～)

前語基・後語基専用としたものも、かならずしも、その用法にかぎられるわ

けでないこと、A類の場合とおなじであるが、結合回数のおおいものは、後語基のほうに多出するようである。前後共用としたもののなかでも、「関係」・「生活」・「運動」・「活動」など上位のものには、後語基として出現する回数のほうが、前語基の場合をうわまわっているものがすくなくない。この傾向は、A類の場合にもみられる。その理由は、語基の結合関係で、「下位概念＋上位概念」という修飾関係をとるものがおおく、使用頻度のたかい語基には、上位概念をあらわすものがおおいことによるものとみられる。逆に、前語基専用のものや、後語基的性格のつよいもので前語基としてもつかわれるものには、「通信（～可能）」・「建設（～認可）」・「貿易（～拡大）」・「戦闘（～開始）」・「関係（～改善）」・「教育（～熱心）」のように、後部分に動作や状態をあらわす属性概念的語基をとともうものもみられる。

この類にふくまれるものは、当然、「スル」をともなって、動詞となることができわけだが、実際には、動詞としてつかわれることがすくなく、もっぱら名詞としてもちいられることがおおいものや、両方ともによく使用されるものも存在する。たとえば、「貿易」・「会議」・「組織」・「関係」・「措置」・「放送」・「選挙」・「戦争」などである。また、これらの語基は、名詞的につかわれる場合は、A類の分類では、〈活動〉にふくまれるものがほとんどであるが、「監督」・「代表」のように、〈人間〉に相当する意味をあらわすものもある。

つぎに、これらの語基が動詞として機能する場合にどのような性格をもつかということを検討しておきたい。その理由は、つぎの章で、語基の結合関係をかながえるうえで、必要だからである。動詞の分類については、石綿敏雄がいくつかの論文*¹⁶で名詞と動詞との結合関係をしらべ、格助詞を中心として、文

*16 国研の報告・論集には、石綿の動詞に関する論考がおおく収載されているが、直接には、前注15の論文のほか、下記の論文を参考とした。なお、本書の152ページの石綿の論文は、これまでの研究の集大成の意味をもつとおもわれる。
「動詞を中心とした語彙の分類」（国研報告51『電子計算機による国語研究XI』所収・49年3月）

型を分類しているのが参考となる。分類の結果を以下にするす。

〈人間・組織〉ガ〈人間・組織〉ト〈〇〇〉スル トコト・ニ
相談・交渉・協定・会議・通信・貿易・演説・協力・投票／戦争・
戦闘・闘争・競争・共闘

〈人間〉ガ〈活動〉スル
労働・活動・運動・作業・生活／遭難

〈人間〉ガ〈場所〉ニ〈移動〉スル
旅行・飛行

〈行為〉ガ〈〇〇〉スル
回復・連続

〈〇〇〉ガ〈〇〇〉ニ〈〇〇〉スル
関係／違反

〈人間・組織〉ヲ〈〇〇〉スル
教育・指導・監督・管理・試験・選挙・代表・組織・経営・防衛・
保護・援助

〈活動〉ヲ〈〇〇〉スル
計画・決定・予定・調整・担当・措置／放送・編集・演奏・記録・記念

〈物〉ヲ〈〇〇〉スル
生産・消費／建設・設計

〈物〉ヲ〈人間・組織〉ニ〈〇〇〉スル
販売・公開・輸出・輸入

〈物〉ヲ〈活動〉ニ〈〇〇〉スル
投資・利用

〈活動〉ヲ〈人間〉ニ〈〇〇〉スル
希望・制限

〈〇〇〉ヲ〈〇〇〉スル
調整・研究・指定・改善・開発・整理・拡大

このような分類をおこなう目的は、語基の結合関係をシンタクティックなレベルにひきあげてかんがえる場合の基礎作業をほどこすことにある。しかし、データに出現した例を中心にかんがえたものなので、量的にもすくなすぎるし、分類のしかたがあらすぎるかもしれないが、この程度のものでも、あとの作業の役にたつはずである。〈人間〉・〈組織〉・〈活動〉・〈物〉に関する項目がおおいことは、A類の語基と対応しており、新聞の用語の特徴を反映しているということができよう。

4.3.2 そのほかの語基

B類の語基は、形容動詞の語幹に相当するものを多数ふくみ、性質や状態をあらわすものがおおい。したがって、前部分に出現するものは、後部分の体言的語基に対して、連体修飾の関係をとりやすい。単独で連体修飾語となるときは、「～ナ」という形態をとるものが多いが、「～ノ」という形態をとるものでも、属性概念的な語基は、ここにあわせることにした。また、「～ニ」という形態をとるものには、「絶対」のようにD類の性格のこいものもある。A類やAC類とことなり、後語基には、結合回数のおおいものは出現しない。後語基としてあらわれる場合は、前語基とのあいだに主述関係が存在する。

〔前語基としてよくあらわれる語基〕

特別(～援助・～価格)・主要(～都市・～部分)・緊急(～集会・～援助)・
一般(～乗客・～情勢)・高速(～道路・～走行)・絶対(～条件・～服従)・
特殊(～兵器・～任務)・重要(～事項・～法案)・単独(～飛行・～首位)

〔後語基としてあらわれる語基〕

可能(通信～)・独自(国鉄～)・必至(難航～)・健全(身体～)・
快調(撮影～)・過剰(設備～)・多大(収入～)・不能(再起～)

前語基としてよく出現するものが、後語基としても出現することはすくなそうであるが、後語基専用として、頻度のおおいものもすくないようである。後語基には、前語基とのあいだに慣用的な結合関係をもつものがみられるのも、そのためであろう。また、前後ともB類の語基が出現する場合には、「自由－自

在」・「不要－不急」などの慣用的なものや、「的確－平明」・「妖艶－華麗」・「豪放－いろいろ」のように、文章語的な性格を帯びたものがみられる。

A B類は、B類とほぼ共通した性格をもつが、語によっては、A類とちがう用法にもっぱらもちいられるものもある。A類的にもちいられる場合は、B類と同様に、状態や性質をあらわすが、A類のところであげた「経済」のように、〈活動〉をあらわしたり、「新鋭」・「不良」のように〈人間〉をあらわしたりするものもある。

① A類的用法…平和(～愛好)・健康(～優良)・名誉(～棄損)・安全(～保障)・自然(～公園)・自由(企業～)

② B類的用法…異常(～乾燥)・最高(～気温)・名誉(～市民)・安全(～地帯)・自然(～増収)・自由(～分売)

B C類・A B C類も、大別する場合には、B類に属させることになる。該当する語基は、かなり限定されるようである。

B C類：共通(国民～)・共同(～研究)・共有(～財産)・現有(～勢力)・類似(～行為)

A B C類：不足(認識～・資金～)・満足(自己～)

C類は、F類とともに、判定の困難なグループである。サ変動詞の語幹となりうるものは、原則として、A類にも属するという規則をたてることができそうであるが、二字漢語を実際の出現形態によって、統計的にあつかう場合に、「～スル」という形態しかとらないもののわくをつくっておいたほうが便利だとかんがえて、独立させた。語基によっては、A C類との弁別だけでなく、F類との異同が問題になるものもすくなくない。以下に例をあげる。

敵対(～関係)・引火(～事故)・総合(～病院)・混成(～部隊)・固定(～資本)・強制(～疎開)・圧さく(～空気)・付帯(～決議)・潜在(～需要)・慶祝(～電報)／佇立(～徘徊)・沈思(～黙考)

F類の語基は、その性格上、他の類との区別があいまいで、自立形式としての用法が絶対にないと判定することがむずかしい。結合形式としての用法が固

定していて、使用頻度がおおいものは少数であって、ほとんどが一回的結合とみられるものだからである。「ガ」や「ヲ」をとることはなくても、「～ノ」という形態をとりそうなものは、いくらか存在する。したがって、漢語複合語基全体としてみた場合に、使用率の上位のものはすくないが、量的には、無視できない部分をしめている。また、A・B・Cの各類と共通した性格をもつものがそれぞれ存在するほか、接辞にちかいものや、語基としての性格があいまいなものまで、各種のものが存在するのが、この類の特色である。以下に、いくつかのグループにわけて、その特徴をしるす。

- ① 他の複合語基や単純語基と結合する回数がおおく、現代語の語基として、比較的、安定しているもの：国際（～会議・～協定）・対外（～政策・～貿易）・抜本（～改革・～対策）・自主（～再建・～独立）・本格（～設計・～捜査）・共産（～主義・～世界）・女流（～作家・～棋士）
- ② 四字漢語などの省略形で、慣用が固定すれば、自立形式をとることもできるもの：労連（鉄鋼～）・財投（～計画）・特捜（～本部）・失対（～事業）・食管（～会計）・小学（～課程）
- ③ 結合する語基との関係が限定的あるいは臨時的なもの：抗生（～物質）・断郊（～競争）・美白（～乳液）・混声（～合唱）・択一（二者～）/胃溶（～粉末）・産銅（～各社）・自装（～原画）・冷熱（～機器）・脱硫（～装置）・討薩（武力～）
- ④ 成語的であり、語基としての性格はよわく、結合形全体が一語基相当にちかいもの：竜頭（～蛇尾）・東奔（～西走）・朝令（～暮改）・紆余（～曲折）・異口（～同音）・茶飯（日常～）
- ⑤ 後語基として出現し、形式的な意味をあらわし、接辞にちかいもの：以外（国連～）・本位（実用～）/次第（勇氣～）・自体（企業～）・自身（選手～）・同志＝同士（本人～・家族～）

①は、三字漢語の構成要素としてもよくあらわれるものである。③は、①と連続的であり、新造漢語の中には、③の段階をへて、①に属するものもあるで

あろう。純粹に⑤に属するものは、それほどおおくはないとおもわれる。「次第」以降の例は、A類やD類に該当するとみるべきかもしれないが、その場合の用法とかなりへだたりがあるとみて、F類に所属させた。「以外」の類例には、「以内」・「以降」・「以来」などがあるが、「以-」形の語基については、宮地の論文に詳しい検討がある。

宮地の分類では、D類（副言系）には、他の系との兼用のものの例がかなりあがっているが、本稿では、兼用をみとめなかったので、少数しか出現していない。また、E類とともに、これらの語基は、構文レベルでの機能が判定の要素としておおきくかわるだけに、もともと、四字漢語の成分とはなりにくい性格をもっているものとおもわれる。

D類：年中（～無休）・直接（～指導）・即時（～停止）・一斉（～搜索）・
同時（～録音）・随時（～食品）

E類：確固（～不動）・片々（学芸～）・揚々（意気～）

5. 語基の結合関係

5.1 形態別にみた結合パターン

前章で、四字漢語を構成する語基の性格について、一応の展望がおわったところで、語基と語基の結合における種々の問題の考察にとりかかる段階にいたった。まず、形態別に分類したそれぞれの類がどのような類と結合しやすいかということを分析してみよう。前語基を縦軸に、後語基を横軸にとって作成したマトリックスが表5である。計の欄の総数は、表3の延べ数の計と一致する。

前後各10種の類があるわけであるから、すべての類どうしが結合すれば、計100種類の結合パターンが出現するはずであるが、A類とAC類へのかたよりがおおきいため、実際には、40種類しか出現していない。しかも、特定のものに集中している傾向がみられる。以下に、出現回数のおおいものの上位10パターンを、出現回数順にあげてみる。回数、総数（3224）に対する比率（パーセント）、および、出現例をしめす。

表 5 前語基と後語基の形態分類による結合回数

後語基 前語基	A	B	C	D	E	F	AB	AC	BC	ABC	計
A	943	12	—	—	2	30	6	725	2	3	1723
B	123	6	—	—	—	4	1	73	—	—	207
C	18	1	—	—	—	2	—	16	—	—	37
D	6	1	—	—	—	1	—	13	—	—	21
E	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	1
F	122	2	—	—	—	9	1	50	—	—	184
AB	48	3	—	—	—	1	—	32	—	—	84
AC	591	9	—	—	—	8	2	338	—	2	950
BC	9	—	—	—	—	—	—	7	—	—	16
ABC	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1
計	1861	35	—	—	2	55	10	1254	2	5	3224

回数 比率

- ① A + A 943 (29.2)…国家 - 主席・宇宙 - 空間・時限 - 爆弾
- ② A + AC 725 (22.5)…団体 - 行動・総裁 - 選挙・技術 - 革新
- ③ AC + A 591 (18.3)…遭難 - 事件・登録 - 選手・経営 - 方針
- ④ AC + AC 338 (10.5)…調査 - 検討・拡大 - 解釈・開会 - 宣言
- ⑤ B + A 123 (3.8)…重要 - 事項・零細 - 農家・既成 - 事実
- ⑥ F + A 122 (3.8)…民主 - 主義・臨戦 - 体制・美白 - 乳液
- ⑦ B + AC 73 (2.3)…公式 - 訪問・重大 - 声明・臨時 - 措置
- ⑧ F + AC 50 (1.6)…抜本 - 改革・国際 - 入札・具象 - 彫刻
- ⑨ AB + A 48 (1.5)…秘密 - 警察・安全 - 地帯・自然 - 科学
- ⑩ A + F 30 (0.9)…主権 - 在民・本人 - 同士・四面 - 環海

ここにあげた、出現率約 1 パーセント以上の 10 種類のパターンをあわせると、全体の 94.4 パーセントをしめていることになる。すなわち、第 11 位の A + B (0.4 パーセント) 以下の 30 種類をあわせても、5.6 パーセントにしか達しない。しかも、出現率 10 パーセント以上の上位 4 パターンをあわせたものの比率は、80.6 パーセントであるから、大部分がこの 4 種類のパターンによってし

められていることになる。上位の4パターンは、いずれも、A類とAC類のくみあわせであり、その点でも、5位以下のパターンとのあいだに、差異がみられる。5位から8位までは、前語基のB類とF類、後語基のA類とAC類とのくみあわせであり、9位で、前語基にAB類が、10位で後語基にF類が、それぞれはじめて顔をだす程度であって、きわめて少数のパターンから、全体が構成されていることがわかる。

この結果を三字漢語中の複合語基の出現率と対照してみると、興味ある相違がみられる。出現率のたかい四類について、前部分および後部分の出現率をくらべると、下記のようなになる。ただし、四字漢語の前語基に相当するものとして、三字漢語の場合は、 $\{(\bigcirc+\bigcirc)+\bigcirc\}$ 型の複合語基を、後語基に相当するものとしては、 $\{\bigcirc+(\bigcirc+\bigcirc)\}$ 型の複合語基を、それぞれ、比較の対象にしている。また、三字漢語の $\{\bigcirc+(\bigcirc+\bigcirc)\}$ 型では、B類とF類の比率がきわめてひくいので、省略してある。数字は、延べ数の比率をパーセントでしめたものである。

	〈前語基〉		〈後語基〉	
	四字漢語	三字漢語	四字漢語	三字漢語
A 類	53.4	39.0	57.7	70.1
AC類	29.5	40.5	38.9	20.5
F 類	5.7	14.4	—	—
B 類	6.4	2.7	—	—

まず、前語基については、三字漢語の場合は、A類とAC類がほぼひとしく、F類もかなりの比率であるのに対し、四字漢語では、A類への集中度がひじょうにたかくなっていることがわかる。逆に、後語基の場合は、三字漢語では、A類が圧倒的におおいのに対し、四字漢語では、A類とAC類の差が接近している。この現象は、つぎのように説明することができる。三字漢語では、複合語基の結合のあいでは、単純語基である。単純語基には、AC類に相当する用言性の語基が出現しにくい。したがって、前部分にA類の複合語基、後部分に

用言性の単純語基というようなパターン（「国内-産」・「各区-立」のような例）はすくない。つまり、体言+用言というパターンは出現しない。ところが、四字漢語では、AC類の中で用言的に機能するものが後部分に出現しうるので、相補的に、前部分では、A類の語基が、後部分では、AC類がふえているといえよう。

また、{○+(○+○)}型の三字漢語の前部分には、B類相当の単純語基（「新-空港」・「大-動脈」・「低-気圧」など）がおおいことも、後部分にA類の複合語基を出現させやすい要因となっている。その逆に、{(○+○)+○}型の三字漢語の単純語基には、A類に相当する自立形式の単純語基（「役員-会」・「政府-案」など）は、比較的すくないため、連体修飾機能をもつB類は出現しにくい。四字漢語の場合に、B類の比率がわずかながらふえているのは、いまのべたことのうらがえしの現象である。三字漢語のF類の比率がたかいのは、F類と結合して、単語相当の機能を付加する接辞性のつよい単純語基（「合理-化」・「自主-性」・「具体-的」など）がおおいためである。四字漢語の後語基には、そうした性格のものがすくないため、F類は、出現しにくい。

このように、四字漢語の場合には、語の内部の構造というよりも、構文レベルでの結合関係がみられるところに、特徴がある。その点に関しては、これまでにも、たびたび、ふれてきたところであるが、語基の結合関係という面からも、三字漢語との相違をうらづけることができるのである。

出現順位10位までの出現例は、さきにしめしたが、11位以下で、比較的、出現数のおおいものの例を以下にあげておく。

A + B…設備-過剰・本人-不在 F + F …奇想-天外・不偏-不党
AC + B…教育-熱心・再起-不能 AC + F …實用-本位・共存-共榮
BC + A…共有-財産・類似-行為 BC + AC…共同-利用・共同-管理

5.2 語基の構文論的結合関係

語基と語基、特に、ここで問題としているような二字漢語どうしの結合関係を論ずることは、語と語の関係を問題とすることにほかならない。そして、そ

れが単なるシンタックスの問題としてだけでなく、意味の問題にもかかわることは当然である。そのような立場からの研究としては、前注*15の論文で、石綿が構文的構造を語構造のレベルに適用することへの提案をしているほか、奥田靖雄、宮島達夫、奥津敬一郎などの本格的な論考*17が発表されている。しかし、ここでは、問題が漢語に限定されていること、四字漢語がみかけ上は単語的よそおいをしているなどの理由から、あえて、先学の研究を十分に検討することなく、筆者独自の方法で、分析を試みようとおもう。ただし、石綿のかんがえかたには、直接・間接をとわず、示唆をうけるところがおおかった。また、学術的発表物ではないが、『岩波国語辞典（第二版）』の巻末にある「語構成解説」にも、ヒントをえた部分がおおきいことをしるしておく。

これまでの分析では、語基を派生の形態によって、A・B…の十類にわけてきたが、結合関係の分類にあたっては、宮地の類詞の範疇にしたがって、四類に整理しなおすことにする。その理由は、形態上は、同一の類に属する語基でも、四字漢語中の用法によって、構文論的なレベルでの機能がことなるものが存在するからである。たとえば、AC類には、A類と同様にもちいられる場合とC類に相当する場合の両方があるし、結合形式専用のF類は、各類と共通する性格をもっている。以下に、四つの類、および、筆者の分類別の十類が主として、どの類に属するかをしめす。

〈A〉(体言系) …A・AC・F

〈B〉(相言系) …B・AB・F・E・BC・ABC

〈C〉(用言系) …AC・C・F

〈D〉(副言系) …D

つぎに、これらの語基が結合する際の関係によって、五つの類をたてる。〈A・A〉のようにしたものは、併列関係をあらわす。また、F類のなかには、「次第

*17 奥田靖雄「日本文法・連語論」(『教育国語』連載中)
宮島達夫『動詞の意味用法の記述的研究』(国研報告 43・47年3月)
奥津敬一郎『生成日本文法論』(49年9月)

（勇気～）」・「本位（自己～）」のように、接辞的な用法をもつものが存在したが、この分類では、それらを対象からのぞいた。

第1類…〈A〉＋〈B〉 〈A〉＋〈C〉

第2類…〈B〉＋〈C〉 〈C〉＋〈C〉 〈D〉＋〈C〉

第3類…〈B〉＋〈A〉 〈C〉＋〈A〉

第4類…〈A〉＋〈A〉

第5類…〈A〉・〈A〉 〈B〉・〈B〉 〈C〉・〈C〉

〔第1類〕

(1) 〈A〉＋〈B〉…〈A〉が〈B〉ノ状態デアル

栄養－豊富・収入－多大・身体－健全・素行－不良・物資－不足
健康－優良・主権－在民・胃酸－過多・安全－第一・人気－絶頂

(2) 〈A〉＋〈C〉

① 〈A〉が〈C〉スル

地盤－隆起・動脈－硬化・士気－低下・大気－汚染・被害－続出
学徒－出陣・景気－過熱・地下－高騰・人気－爆発・都市－膨張

② 〈A〉ヲ〈C〉スル

人権－尊重・果実－栽培・土地－買収・予算－編成・気分－転換
主席－公選・平和－愛好・営農－改善・社員－募集・果実－栽培
名画－進呈・結婚－披露・記憶－喪失・消費－抑制・取材－制限

③ 〈A〉ニ〈C〉スル

党規－違反・国連－加盟・大学－付属・内政－干渉・軍事－利用
大臣－就任・民間－移託・設備－投資・試写－招待・記者－会見

④ 〈A〉ニ〈C〉スル 〈A〉＝〈時〉

事後－承認・春季－闘争・早期－発見・年末－調整・初日－公演
（雨天－延期）

⑤ 〈A〉デ〈C〉スル 〈A〉＝〈場所〉 デコデ・ニ・ヲ

屋外 - 労働・街頭 - 募金・抗内 - 作業・海外 - 公演・実地 - 修練

月面 - 着陸・海外 - 派兵 / 大陸 - 横断・国内 - 旅行 / 家宅 - 搜索

⑥ 〈A〉ニヨッテ〈C〉スル 〈A〉 = 〈物・X〉

電話 - 連絡・風船 - 旅行・艦砲 - 射撃・書類 - 選考・水力 - 発電

武力 - 解決・職権 - 決定

⑦ 〈A〉ガ原因トナッテ〈C〉スル

薬物 - 中毒・汚職 - 解散・化学 - 変化

⑧ 〈A〉ヲ目的トシテ〈C〉スル

観光 - 旅行・治安 - 出動・政治 - 献金

⑨ 〈A〉ニツイテ〈C〉スル

文化 - 協力・航空 - 交渉・地位 - 協定・服装 - 相談

(1)に属するものは、あまりおおくない。AがBノ状態デアルのほかには、「国民 - 共通」・「高速 - 安全(～設計)」など、少数ではあるが、A = Bノ状態デアルという項目をたてれば、そこにいれることができるものもある。(2)に属するものはおおいが、AとAC以外の要素は、②AヲCスルの項のほかには、ほとんどあらわれない。B + Fの「高速 - 耐久(～テスト)」などは、③に該当する例といえよう。

〔第2類〕

(1) 〈B〉 + 〈C〉 … 〈B〉ノ状態デ〈C〉スル

新規 - 開店・絶対 - 反対・特別 - 参加・正式 - 許可・個別 - 面接

慎重 - 対処・均等 - 償還・自動 - 反転・一時 - 解雇・完全 - 消毒

(2) 〈C〉 + 〈C〉 … 〈C〉ノ状態デ〈C〉スル

徹夜 - 観測・徐行 - 運転・優先 - 討議・継続 - 審議・徹底 - 批判

(3) 〈D〉 + 〈C〉 … 〈D〉ノ状態デ〈C〉スル

即時 - 停止・一斉 - 調査・直接 - 搜索・同時 - 録音・年中 - 無休

この〔第2類〕と前項の〔第1類〕は、後語基に述語相当部分がくる点では

共通するが、〔1類〕では、前語基とのあいだに格支配的關係が存在するのに対し、この〔2類〕は、連用修飾的關係がみられる点に相違がある。ただし、後部分の述語相当の語基は、体言的な性格をもかねそなえているため、連体修飾的關係を特徴とする〔第3類〕とは、連続的であって、決定的なメルクマールは存在しない。

たとえば、(3)項のD+Cは、もっとも〔第2類〕的であるはずだが、D類の語基でも、四字漢語の構成部分になりやすいのは、他の類との兼用性の語基であって、「全然」・「突然」のようなD類専用語基は出現しにくい。その点では、四字漢語の構造が構文論的であるとはいっても、ある種の制約が存在するようである。また、(1)項は、B+Aと連続的であり、(2)項の場合は、〔第5類〕の(3)C・Cとの間がかならずしも明確ではない。

しいて、メルクマール的なものをあげるならば、この類は、結合形全体がスルをともなって派生することがおおい。たとえば、例にあげた(1)の「正式－許可」は、それだけでは、連体修飾的とみられるが、実際には、「～スル」というかたちでもちいられたものである。上にあげたものをふくめて、「個別－面接」・「過太－評価」・「不時－着水」などがスルをともなって出現している。一見、スルをともないそうでも、「慎重－対処」などは、「議長は慎重対処を政府に要望…」のような文脈でもちいられたものである。このへんに、新聞の文章の特徴をみることができる。

〔第3類〕

(1) 〈B〉+〈A〉…〈B〉ノ状態デアル〈A〉

有名－書店・特殊－兵器・主要－目標・急性－肝炎・臨時－国会
重大－声明・史的－考察・応急－工事・必要－条件・秘密－指令
固定－資本・積極－外交・悪徳－業者・基礎－調査・中堅－作家

(2) 〈C〉+〈A〉…〈C〉スル〈A〉

救援－投手・勤労－意欲・虐待－事件・消費－電力・演奏－技術

発掘 - 作業・総括 - 質問・誘致 - 合戦・通信 - 組織・製作 - 意図

(敵対 - 行為・噴霧 - 装置・臨戦 - 体制・被害 - 個所・汚職 - 議長)

(1)と(2)は、体言性のつよい後語基(ほとんどがAかAC)に対して、前語基が連体修飾関係にあるという点で共通し、(1)は、状態や性質を、(2)は、動作をあらわすものがおおい点で、区別される。ただし、その意味的なちがいは、連続的であって、分明ではない。むしろ、(1)と(2)のちがいは、あとで詳述するように、(2)に属するものには、基本的な構文パターンの一種の変形であるものがおおいところにある。

この類に属するものは、〔第4類〕について、かずがおおい。前語基に、F類がおおく出現するもの、この類の特徴である。F類で、(1)の前語基となるものは、例にあげた、「積極(～外交)」・「悪徳(～業者)」のほか、「国際(～資本)」・「専制(～君主)」などがある。(2)に属するものには、「噴霧(～装置)」・「臨戦(～体制)」のほか、「愛国(～精神)」・「産炭(～地域)」などがある。このちがいは、(2)に属するF類複合語基の成分としての単純語基に、「噴」・「臨」・「愛」・「産」など、訓として和語動詞との対応をもつものや、単独でスルをとめない派生することのできるものがおおい点にある。したがって、B類でも、「国有(～財産)」・「外来(～患者)」などは、(1)と(2)のどちらに属させても、おかしくないことになる。また、A類の語基でも、属性概念をあらわす傾向のつよいものは、この〔第3類〕の前語基となる資格をもつ。(1)に属するものは、例にあげた、「基礎(～調査)」・「中堅(～作家)」のほか、「人気(～歌手)」・「貧困(～学生)」などがある。(2)では、「被害(～個所)」・「汚職(～議員)」のほか、「匿名(～老人)」のような例をあげることができる。意味的に分明でないというのは、このようなことをさすが、A類の語基でも、この種のものは、決してすくなくないから、分類にあたって、(2)の場合のメルクマールとして、スルをとまうかいなかという条件をたてるべきかもしれない。

〔第4類〕

(1) 〈A〉 + 〈A〉

この類に属するものは、もっともおおく、その結合関係もまた複雑である。したがって、これまでのような分類・記述をすることは、簡単にはできないので、本稿では、保留することにする。ただし、その記述にあたっては、さきに55ページにしめたような、意味による分類が有効とかんがえられるので、出現数のおおいものについて、例をあげるにとどめる。

① 〈〇〇〉 + 〈人間〉

〈人間〉 + 〈人間〉…男性・歌手・女子・店員・青年・医師・新人・作家

〈組織〉 + 〈人間〉…国家・元首・大学・講師・家庭・婦人・税関・職員

〈活動〉 + 〈人間〉…国防・長官・事務・総長・野球・選手・事件・記者

〈時〉 + 〈人間〉…現代・女性・次期・会長・日曜・画家・戦中・世代

〈場所〉 + 〈人間〉…世界・人民・各国・青年・外国・選手

② 〈〇〇〉 + 〈組織〉

〈組織〉 + 〈組織〉…連邦・政府・大学・病院・警察・機構

〈人間〉 + 〈組織〉…人民・公社・女子・大学・歩兵・学校・小児・病院

〈活動〉 + 〈組織〉…水産・会社・体操・協会・野戦・病院・商業・高校

〈場所〉 + 〈組織〉…海外・公館・外国・企業・地方・銀行・現地・法人

③ 〈〇〇〉 + 〈活動〉

〈人間〉 + 〈活動〉…大衆・活動・学生・剣道・議員・外交・学長・人事

〈組織〉 + 〈活動〉…学校・体育・高校・野球・議会・政治・会社・人事

〈物〉 + 〈活動〉…石炭・産業・綿花・借款・食糧・政策・空気・力学

〈場所〉 + 〈活動〉…宇宙・科学・遠洋・漁業・外国・映画・郷土・芸能

〈時〉 + 〈活動〉…新年・宴会・雨期・攻勢・年次・総会・春季・野球

④ 〈〇〇〉 + 〈物〉

〈物〉 + 〈物〉…原子・爆弾・純毛・毛布・洗剤・溶液・皮膚・細胞

〈活動〉 + 〈物〉…工芸・家具・工業・用水・化学・肥料・将棋・用具

〈場所〉＋〈物〉…外国－製品・熱帯－産品・月面－写真・高山－植物

⑤ 〈○○〉＋〈時〉

〈時〉＋〈時〉…来月－中旬・同夜－深更・（前週－後半）

〈活動〉＋〈時〉…入試－期日・犯行－時間・政治－危機・事故－当時

⑥ 〈○○〉＋〈場所〉

〈場所〉＋〈場所〉…地球－内部・皇居－外苑・山岳－地帯・左翼－中段

〈活動〉＋〈場所〉…工業－用地・犯罪－都市・酪農－地帯

このような分類は、多分に恣意的なところがあり、意味項目もあらずぎるかもしれない。また、さきに〈抽象〉としたものは、ここでは、結合の特徴とはしなかったので、この分類からもれているものも、かなり存在する。たとえば、〈現象〉というような項目をたてる必要があろう。「金融－恐慌」・「都市－公害」・「胃病－患者」などは、それによって、分類が可能である。

しかし、この程度の項目でも全体の三分の二ちかくの例を分類することができる。もちろん、対象が新聞のデータであることが、このような項目のたてかたを有利にしていることはいなめないが、たてかたさえ精密なものになれば、対象のいかんをとわず、出現例を意味項目のマトリックスに位置づけることができよう。種々の語彙調査の結果を比較する場合に、単語の種類をくらべるだけでなく、その結合関係について、このような分析をすることも必要だろう。

このような基礎作業をおこなったうえで、構文論的關係にすすむわけであるが、まだ、その準備は十分でない。しかし、前語基をP、後語基をQとおいてつぎのような記述をおこなうことをかんがえている。

〔例1〕

〈Q〉ガ〈P〉デXスルソノ〈Q〉

P＝〈場所〉、Q₁＝〈人間〉・Q₂＝〈組織〉・Q₃＝〈物〉・Q₄＝〈活動〉…

〔例2〕

〈P〉ノ属性＝似タ〈Q〉

P＝〈物〉、Q₁＝〈物〉…直線－道路・珠玉－作品

Q₂ = 〈動作〉…連鎖-倒産・白紙-委任

〔第5類〕

(1) 〈A〉・〈A〉…〈A〉オヨビ〈A〉

鉄骨-鉄筋・低温-低圧・万物-万象・党利-党略・用字-用語

竜頭-蛇尾・尊王-攘夷・大所-高所・親類-知人・通信-報道

(2) 〈B〉・〈B〉…〈B〉オヨビ〈B〉

不要-不急・不偏-不党・自由-自在・妖艶-華麗・的確-平明

(3) 〈C〉・〈C〉…〈C〉オヨビ〈C〉

東奔-西走・雲散-霧消・自問-自答・感謝-感激・暴飲-暴食

善戦-健闘・沈思-黙考・比較-対照・調査-検討・普及-宣伝

この類には、いわゆる四字漢語らしいものが多い。この類は、おなじ性格の二語基が連合したにすぎず、結合形がもとの語基と文法的性格をかえることはあまりない。ただし、故事成語の類には、前語基と後語基が、形式や意味のうえでなんらかの対をなしているものが多い、現代語としては、全体が擬似複合語基化しているものもみられる。

5.3 基底構造の分析—〈C〉+〈A〉の場合—

語基の種類と結合の順序にもとずいた、以上のような分類でも、ある程度のはことは、あきらかにされる。たとえば、〈A〉と〈C〉からなる結合でも、「貨車-暴走」の場合は、「貨車が暴走スルコト」をあらわし、「暴走-貨車」の場合は、「暴走スル貨車(=モノ)」をあらわしている。しかし、おなじ、〈C〉+〈A〉の構造をもつものでも、「保護-動物」の場合は、「保護スル動物」のように解してはあやまりであって、〈C〉である「保護」の主体は、ここには顕現していないXである。すなわち、「保護-動物」は、「Xニヨッテ保護サレル動物」のように解さなければならない。このちがいは、〈C〉である「暴走」と「保護」の文法的機能によってもたらされるものであるが、より正確に言えば、四字漢語のなかには、文のレベルの構造が変形をへて語と語の結合に関係してい

るものがあることによる。すなわち、比喩的な意味で、表層構造と深層構造の
関係に擬せられるようなものである。言語の機械処理などでは、辞書の内容と
して、各見出し語に、そうしたレベルでの情報をあたえておくことが必要であ
るとおもわれる。

そこで、前節にしめした、いわば表層的な構造を、深層構造のレベルで分析
しなおす必要がある。とはいっても、変形生成文法流の深層での基本的構文パ
ターンをここで記述するつもりはない。ここでは、前節にあげた、みかけの構
造から操作的にとらえることができる構造を、「基底構造」とよぶことにする。
この名称は、林四郎が漢字によって表記された語（おおくは、単純語基どう
しの一回結合）の構造を分析する際にもちいたもの^{*18}を借用したものである。

分析の対象としたのは、〔第3類〕の(2)〈C〉＋〈A〉に属するものである。
その理由は、すべての出現例を分析する余裕がないこと、また、〈C〉をふくん
でいるため、動詞述語文のレベルでの把握がしやすいことによる。分類のてづ
きとしては、〈C〉に相当する語基が単独でスルをとめない動詞として機能す
る場合に、どのような格助詞をとりやすいかということをおもな指標として、
それと〈A〉に相当する名詞との関係を考察した。その場合の格助詞としては、
ガ・ヲ・ニ・トに注目し、そのほかは、臨時的な要素としてあつかった。

〈C〉＋〈A〉の基底構造

1. Xガ〈C〉スル〈A〉

〔X＝〈A〉〕

① 〈A〉ガ〈C〉スルツノ〈A〉

暴走－貨車・回転－椅子・経過－年数・対立－異見・勤労－学生

〔Xキ〈A〉〕

② Xガ〈A〉デ〈C〉スルツノ〈A〉 〈A〉＝〈場所〉 デコデ・ニ・

カラ・ヲ

*18 「漢字使用の基底構造」（48年春季国語学会研究発表題目）

群生 - 地区・着水 - 場所・飛行 - 甲板・登山 - 基地・横断 - 歩道

③ Xガ〈A〉ニ〈C〉スルソノ〈A〉 〈A〉 = 〈時〉

死亡 - 時刻・潜伏 - 期間・創業 - 時代・停車 - 時間

④ Xガ〈A〉ヲツカッテ〈C〉スルソノ〈A〉 〈A〉 = 〈物〉

喫煙 - 用具・洗面 - 設備・学習 - 家具・暖房 - 器具

⑤ Xガ〈A〉ニヨッテ〈C〉スルソノ〈A〉 〈A〉キ〈物〉

活動 - 方針・自衛 - 本能・離職 - 理由・就職 - 条件・降下 - 技術

⑥ Xガ〈A〉ニツイテ〈C〉スルソノ〈A〉

合意 - 事項・妥結 - 内容

⑦ Xガ〈C〉スルトコロノ〈A〉

発光 - 現象・倒産 - 件数・遭難 - 事件・疲労 - 症状・退職 - 年金

死亡 - 記事 (Xガ〈C〉シタコトヲ伝エル〈A〉)

爆発 - 災害 (Xガ〈C〉スルコトガ原因トナル〈A〉)

2. XガYヲ〈C〉スル〈A〉

[Y = 〈A〉]

① Xガ〈A〉ヲ〈C〉スルソノ〈A〉 = ((X) = 〈C〉サレタ〈A〉)

保護 - 動物・拡大 - 写真・消費 - 電力・指導 - 価格・予告 - 期限

[X = 〈A〉]

② 〈A〉ガYヲ〈C〉スルソノ〈A〉 〈A〉 = 〈人間〉・〈組織〉

選定 - 委員・販売 - 社員・搜索 - 本部・推進 - 母体・経営 - 主体

[Xキ〈A〉, Yキ〈A〉]

③ Xガ〈A〉デYヲ〈C〉スルソノ〈A〉 〈A〉 = 〈場所〉・〈組織〉

密輸 - 基地・調査 - 地域・収容 - 施設・製造 - 工場・保管 - 倉庫

④ Xガ〈A〉ニYヲ〈C〉スルソノ〈A〉 〈A〉 = 〈時〉

決算 - 期日・猶予 - 期間・施行 - 期間・実施 - 段階

⑤ Xガ〈A〉ヲツカッテYヲ〈C〉スルソノ〈A〉 〈A〉 = 〈物〉

計量 - 器具・発射 - 装置・輸送 - 船舶・消化 - 酸素・運転 - 資金

⑥ Xが〈A〉ニヨッテYヲ〈C〉スルソノ〈A〉 〈A〉キ〈物〉

解決-手段・決定-方法・判定-基準・演奏-技術・検討-材料

⑦ XがYヲ〈C〉スルコトコロノ〈A〉

虐待-事件・開発-状況・独占-傾向・鎮静-効果・通報-義務

観測-資料 (Yヲ〈C〉シテエラレタ〈A〉)

促進-大会 (Yヲ〈C〉スルコトヲ目的トシタ〈A〉)

3. XがYニ〈C〉スル〈A〉

[X=〈A〉]

① 〈A〉がYニ〈C〉スルソノ〈A〉 〈A〉=〈人間〉・〈組織〉

在籍-学生・関係-各相・加盟-団体

[Xキ〈A〉, Yキ〈A〉]

③ XがYニ〈C〉スル〈A〉

奉仕-価格・違反-容疑・応募-要領・投資-単位・反発-基調

求刑-公判 (XがYニ〈C〉スルタメニオコナウ〈A〉)

就職-資格 (XがYニ〈C〉スルノニ必要ナ〈A〉)

4. Xが〈Y〉ヲZト〈C〉スル〈A〉 トコト・ニ

① Xが〈A〉ニZト〈C〉スルソノ〈A〉 〈A〉=〈時〉

合併-期日・会見-時間・婚約-期間

② XがZト〈C〉スル〈A〉

交渉-過程・対戦-成績・共闘-態勢

通信-衛星 (Xが〈A〉ヲツカッテZト〈C〉スルソノ〈A〉)

3と4は、該当例が少数なので、1・2のように細目にわけをしないで、3-②、4-②にまとめてあげ、やや例のおおきものだけ、サンプルとして、3-①、4-①にしめた。また、1と2の各⑦に所属させたものでも、①~⑥のように一項をたてることができそうなものもあるが、未整理として、⑦にふくめてある。

ただし、①~⑥と⑦とは、構造上、おおきなちがいをもつ。すなわち、①~⑥

の〈A〉は、〈C〉を述語とする基底構造の文の成分となっているのに対し、⑦に属する〈A〉は、未整理のものをのぞけば、基底構造の成分となっていない点で区別される。このような関係は、一般の文中における連体修飾述語文と被修飾語とのあいだにもみられる。それについては、すでに高橋太郎が問題を提起し^{*19}、奥津敬一郎が前注 17 の著書で詳述している。

また、①～⑥の〈A〉には、 $X = \langle A \rangle$ 、 $Y = \langle A \rangle$ のようにあらわした、基底構造をあらわす文の必須成分となるものもある。1 - ①、2 - ①、2 - ②がそれである。その点では、他のグループに属するものが臨時的な成分であるのとは、性質をことにする。また、このようなタイプのものは、3 と 4 にはみられなかった。データが少数だったせいかもしれないが、ニヤトを要求する〈C〉には、このタイプの構造をとりうるものは、ほとんどないようにおもわれる。ただし、〈A〉 + 〈C〉の類には、「党規 - 違反」・「記者 - 会見」のような例があり、〈C〉 + 〈A〉型の構造のうける制約をしめしている。

6. 考察の結果と今後の課題

これまでの考察であきらかになったことを、はしめに設定した目的にてらして、整理してみると、つぎのようになる。

- ①四字漢語は、直接に格助詞をとまうか、他の語基と結合してもちいられることがおおく、二字漢語や三字漢語と比較して、スルやダをとまうて、いわゆるサ変動詞や形容動詞の語幹となることがすくない。
- ②四字漢語を構成する単純語基は、I 型 $\{(\bigcirc + \bigcirc) + (\bigcirc + \bigcirc)\}$ のような順序で結合するものがおおく、全体の 90 パーセント以上をしめる。
- ③非 I 型で、「三字漢語」 + 「一字漢語」という構造をとるものの、一字漢語に相当する単純語基は、三字漢語の成分として二字漢語と結合する場

*19 高橋太郎「動詞の連体修飾法」(国研論集『ことばの研究 1』34 年 2 月)

同上「動詞の連体修飾法(2)」(国研論集『ことばの研究 2』39 年 12 月)

合に比較して、種類もすくなく、用法も限定される。

- ④ I 型の成分としての複合語基には、自立形式の場合に、体言に相当する A 類、用言をも構成しうる AC 類が、前部分・後部分ともに、おおく出現する。前部分では、相言に相当する B 類や結合形式専用の F 類も、比較的、出現率がたかい。

- ⑤ I 型では、A 類と AC 類の語基の結合形である、A + A, A + AC, AC + A, AC + AC の四パターンで、全体の 80 パーセントがしめられ、ついで出現率のたかい、B + A, F + A, B + AC, F + AC の四パターンをあわせると、八種類のパターンで、全体の 92 パーセントをおおうことになる。

- ⑥ 複合語基どうしの結合関係は、主述関係、連体修飾的關係、連用修飾的關係などの構文論的タイプに分類することができる。また、〈C〉類をふくむものには、基底となる文構造の変形として、説明することができるものもある。

以上の考察の結果は、かならずしも、十分なものでなく、筆者としては、書きたりなかったこと、補わねばならないことが、たくさんあるが、今後の課題としておく。そのいくつかを以下にする。

- ① 語基の形態別の分類は、結合形式として出現したものについて、自立形式の場合の用法を推定しておこなったものであり、実際に自立形式として出現したものを対象として、分析する必要がある。
- ② 語基と語基の結合率は、統計的方法で処理することが可能である。それによって、語基の結合の可能性を数値化し、新しい結合形（四字漢語）がうまれる確率を推定することができよう。
- ③ 語基の結合関係の分類は、試行的なものであり、〈A〉類の意味的分類や基底構造の構文論的考察をすすめる必要がある。とくに、〈A〉 + 〈A〉類の分析がいそがれる。
- ④ データは、新聞の文章から採集したものであり、以上の結果に、どのよ

うな新聞文章の特徴があらわれているかを、他のデータと比較する必要がある。今後、当研究所でおこなわれる語彙調査では、本稿でとったような方法を可能とする設計をかんがえなければならない。

(49・10・31)